町史の行間

幻の王宮瓦

岩永勢都子氏ほかより寄贈された緑釉瓦（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）

先ごろ、町内にある佐賀県立九州陶磁文化館で開催された「肥碟山信甫と明治の有田」展で展示された作品の中に、田代家が手掛けた緑釉瓦がありました。

田代家は幕末から明治にかけて有田焼の海外貿易を独占し、一族によって国内外に田代屋、田代商店などを開店してその商圏を拡張した有田屈指の窯焼きであり、豪商でした。

昨年、田代家の子孫の方によって陶磁器などの製品が九州陶磁文化館へ寄贈され、貿易の一手販売の許可書や帳簿などの文書 1329 点を当館へ寄贈していただきました。

九州陶磁文化館で展示された作品のひとつに、緑釉瓦がありました。これは、ある史実を伝えるものでした。そのことについて『肥前陶磁史考』は次のように記しています。

「晩年佐賀県庁の紹介にて、朝鮮王宮建築用の緑釉瓦の注文を引請け、早岐の広田にて製作納入せしところ、数年を経て釉面に氷裂を生ぜしとて異議を持ち込まれ頗る損失を招くに至った」

田代家文書の中にもこの件について触れたものが残っていました。明治 26 年（1893）11 月 20 日付けの文書には「緑釉瓦」という表現ではなく「青瓦」とあります。それによれば田代家が納めた王宮用青瓦が「送輸之期に遅れたるのみならず既に当地に使用に不適合なる経験も有之、到底引受難きもの」ということで、今まで支払った代金を返済するようにと朝鮮国から申し出が来ています。1378 円 15 銭 6 厘の内、既に彼の地へ送っている青瓦 700 枚の代金とその運送代金を除き、さらに青瓦 1000 枚の代金 111 円とその運送代金 31 円 70 銭を除いた 1235 円 45 銭 6 厘を返金するようにとの通知が京城の杉村濬（すぎむらふかし）(当時公使館書記) から外務次官 林 董（はやしただす） 宛てに届いています。

同文書にはこの件を担当した金彰鉉が「国王陛下より直接厳重なる督促を蒙り居り候由にて本人も殆ど失神の姿」となっており、実に気の毒であるから、今一度田代店へ説諭するよう佐賀県知事に照会してほしいと伝えています。

このように、国際問題にまで発展しそうな気配を漂わせながら、その後の経緯は『肥前陶磁史考』が伝えるように、この失敗で田代家は大きな損失を蒙り、次第に家産を傾ける一因となったようです。

この緑釉瓦・青瓦が使われたのは明治 26 年に工事が始まった景福宮と思われます。過日、九州陶磁文化館を訪れた韓国の建築文化財担当者 (ソウル文化遺産研究院長) の梁潤植氏が展示中の田代家の緑釉瓦を見て、景福宮の台所 (焼厨) 址の発掘調査で類似の緑釉瓦が出土していることを、鈴田由紀夫副館長に伝えられたそうです。

このほかにも田代家文書には明治 24 年 12 月付けで、朝鮮国京城漢城主簿金彰鉉と佐賀県西松浦郡有田町田代商行代理金子関太郎との間で交わされた大朝鮮国大闕所用青瓦の「定約款」があります。また、同年 8 月の暴風のため生瓦及び瓦窯に至るまで破損したことを記した文書もあり、この辺りの時間の経緯と問題の対処の仕方に多少疑問も残りますが、田代家は明治 23 年に長子助作が急逝し、さらにはこの王宮瓦の失敗で、窯焼き・商社としての家業を閉じることになっていきました。

季刊 皿山 No.84 冬 2009

有田町歴史民俗資料館・館報

んの採集品だけではなく、福岡県芦屋町歴史民俗資料館所蔵の芦屋沖海底遺跡からの出土品や、お隣の長崎県波佐見町の窯跡や、有田町内の窯跡から出土した陶片も参考資料として展示しました。

今回展示した資料は、主として筑前岡垣浜で採集された陶片でしたが、同じような有田・肥前の陶磁器は北海道から薩摩まで、全国各地の海岸に打ち上げられています。これらは肥前地方から全国へ出荷され、消費地に向ったものが、不幸にもその途次、船が難破し、積み荷もろとも海に沈んだのでしょう。

来館した中樽在住のある人からは「こんな安物ばかり並べて！」という意見も伺いました。しかし、江戸時代後期になると、海外輸出時代も終わり、国内市場の比重が大きくなりました。そのため、量産の技術を駆使して、より安価な焼き物を生産するようになりました。その製品を筑前商人などが全国の消費地へ運んだことで、有田焼が一般家庭に普及していったことも史実の一端です。

来年度は展示資料をさらに全国へと対象を広げ、全国の海岸から引き揚げられた肥前陶磁器を紹介する企画展を開催できればと思っています。現在、その情報も収集していますが、さらに「自分の所にも打ちあがっているよ」という情報をお持ちの方は、ぜひお知らせください。

来館者の声

○有田焼を海から拾ってきたことには驚きました。(吉野ヶ里町：中1)

○運搬、展示には大変な時間がかかられたのでは。江戸後期の庶民の活動がしのばれて、磁器の特色や窯元を探るなど楽しめる。(お名前不詳)

○浜にうちあげられたり、海にしずんでいた物がきれいにのこっているのでびっくりしました。(お名前不詳)

○添田さんの漂着陶磁器コレクション展で、私が今まで全く知らなかった筑前商人の存在が分かり、また有田・伊万里間の上手路・下手路ルートなどが分かり、ここに来て良かったと思いました。　(諫早市：O・H)

◇出版物の紹介◇

今年度の企画展に合わせて、アジア水中考古学研究所と有田町歴史民俗資料館では、日本財団の助成を受けてリーフレットを発行しました。

添田征止さんが収集された岡垣浜採集陶磁器、また芦屋沖の海底で発見された陶磁器や、資料に残る筑前商人の動きなどについて紹介しています。販売は当館で行っていますので、ご希望の方は左記にてお求めください。

定　価　三百円
販売場所　有田町歴史民俗資料館

おきたいという方や、有田に引っ越してきて有田の事をもっと知りたいからという方などさまざまです。参加者に資料などを渡した後、事務局から今後の活動内容などを説明しました。

活動は泉山隊、中樽・上幸平隊、大絵本隊、白川・稗古場隊、中の原・岩谷川内隊の5グループに分かれ、それぞれが150年前の有田を描いた古地図と現在の地図を持って、地区内を歩き、その違いを確認したり、古老の方に昔の有田をお聞きすることから始めたいと思います。

最終的な目標は、来年5月をめどに各隊で150年前と現在の違いを確認した後、現在の地図に書き加えて、一目で違いがわかる「新有田皿山絵図」を完成させたいと思っています。

活動は今、始まったばかりです。面白そうだなと思われる方はどうぞふるってご参加ください。お待ちしております。

活動中の中の原・岩谷川内隊

お問い合わせはこちらまで♪

アリタ・ガイド・クラブ
☎050－5539－5349

有田町歴史民俗資料館
☎　0955－43－2678

企画展開催しました

平成21年度企画展「海揚りの有田焼～筑前岡垣浜を中心に」

今年の企画展は、11月1日から30日までの1ヶ月にわたり、福岡県遠賀郡岡垣町在住の添田征止さんが約30年間、近くの岡垣浜（三里松原海岸）で採集された有田焼など約六五〇点ほどをお借りして展示しました。

開催初日には添田さんも駆け付けられ、「里帰りができてよかった」と喜んでいただきました。また、広島県で同じように河川に沈んでいる陶片を採集している久保公子さんも同席され、しばし陶片採集の話に花が咲きました。企画展を見学の後、町内の窯跡などを案内しましたが、ちょうど町内のあちこちでは陶磁器祭りも開催されていましたので、現在の有田焼もたくさんあったのですが、お二人の関心はもっぱら窯跡やその周辺にある陶片に向けられていました。もしかすると、この方々は有田の人以上に昔日の有田焼、それを作った職人さんたちに対する愛惜の念が深いのかもしれないと思ったものでした。

館内を見学される添田さん

21日～22日、夜間開館とライトアップを実施

また、期間中は東京都や石川県、鹿児島県など町内外から多くの方に見学いただきました。特に11月21日から22日にかけて、ちょうど館の周辺の紅葉が一番の見ごろになるので、昨年に引き続き有田町役場有志の協力を得て、紅葉のライトアップと共に、夜間開館も行いました。

今回の企画展は平成21年度海の文化遺産総合調査プロジェクトの一環として、アジア水中考古学研究所と当館との共同で行った「福岡県岡垣浜採集陶磁器調査」の成果でもありました。展示資料は添田さ

⏏

花王コミュニティミュージアム・プログラム2009

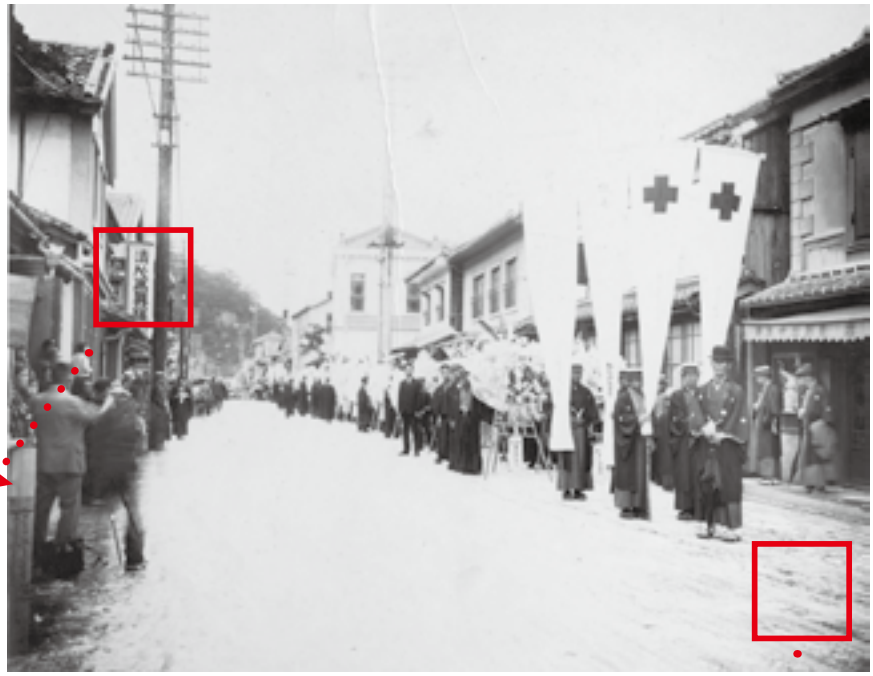
「150年前の有田皿山ば　歩こう隊」の活動が始まりました

今年度、花王コミュニティミュージアム・プログラム2009の助成を受け、NPO法人「アリタ・ガイド・クラブ」（大橋康二理事長）と当館との協働で「150年前の有田皿山ば歩こう隊」の活動を始めました。

11月8日（日）、有田町生涯学習センター3階の視聴覚室で発会式を開催しました。それまでに参加申し込みをされたのが39名。年齢も80代から小学生まで、中には一家総出での参加もあります。その動機を伺いますと、お祖母さまが子供にも孫にも古い有田の事を伝えて来なかったので、この機会に話して

発会式の様子

時　を　切　り　抜　く



葬列の写真（香蘭社蔵）

道路にまかれた白砂

このほど、新たに見つかった写真を紹介します。これは香蘭社に寄贈されたもので、葬列の様子を撮影した写真です。背景に写る香蘭社の社屋は、時代と共に少しずつ変化していきますが、この写真には昭和 11 年に増築された部分がなく、それ以前であることがわかります。さらに、先頭に立つ人が持つ旗には「敬弔」、花輪にも「敬供」という文字があり、また、赤十字の旗もあって、亡くなった方が赤十字社社員だったと思われます。

そのほかにも、写真からいくつかの情報が得られます。左側に当時本幸平にあった「清心写真館」の看板があります。さらに道路も現在の幅のようです。これは昭和 2 年くらいから 7 年にかけて工事が行われて現在の幅に拡幅されたものです。

また有田町役場日誌によれば、昭和 10 年 5 月 29 日に「故香蘭社長深川栄左衛門氏葬儀 (西松浦郡陶磁器同業組合葬) を有田小学校校庭に於いて執行」という記事があります。当時、葬儀の多くは寺院や墓地の広場などで行われていたようですが、特に功績のあった人などは小学校の校庭で葬儀を行っています。九代深川栄左衛門さんは、明治 29 年に田代呈一さんと共に西松浦郡陶磁器品評会を提唱し、大正 5 年から 11 年にかけては有田町長をつとめています。そういうことから類推すると、この写真は九代深川栄左衛門さんの葬列が、今まさに自宅を出発しようとしている所だと思われます。以上の点から、この写真が撮影された年代は昭和 7 年から 11 年の間に想定されます。

さらに、見落としてしまいそうな情報が写っています。それは道路にまかれている白砂です。ちょっと分かりづらいですが、箒のようなもので掃いた跡を見る事ができます。昔、泉山の陶石を唐臼で砕いていたころの産物だった白砂ですが、有田皿山では葬儀や婚礼やお盆などの行事、または特別なお客様をお迎えする際に、道や広場に白砂をまいていたそうで、この写真はそれも証明しています。

嫁入り道具行列の写真（香蘭社蔵）

また、同じく香蘭社所蔵の写真で、嫁入り道具の行列が撮影されたものがあります。これは、道路拡幅前の様子などから、大正 13 年、熊本県八代から嫁いでこられた十代深川栄左衛門さんの妻、輝子さんの婚礼の様子だと思われます。

一枚の写真は、このように様々な情報を現代に伝えてくれます。皆様のお宅にも古い写真が眠っていませんか？

季　刊　『皿　山』

通巻 84 号（平成 21 年 12 月 1 日）

編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1

☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185